

詩と禪

成願寺住職 山口晴通

今回、はからずも、この地において、皆様にお目にかかる御縁を得ましたことを、非常に光榮に存じます。

私は、約半世紀前に出家をしました。以来、師匠のもとでの修行を基本として大本山永平寺をはじめ、各種僧堂の行事に参加しました。

また、駒澤大学におきまして、永年、禪学を中心に研究してまいりました。

そこで本日は、私のこれまでの体験を通しての事柄が、日夜、参禪を心がけている皆様に、

少しでも御参考になれば、有難いことと思えます。

皆様には、すでに御承知のことではありますが、禪と中国の詩とは、非常に密接な関係にあります。

それは本来、詩そのものが、国家や民族を超越して、それぞれの言語生活の発達につれて、自然発生的に成立したものと思われま

す。それは、時には自然界を恐れる、祈りの詩うたであり、愛を告白する心の叫びでもあります。

ヨーロッパにおける、各民族の伝承せる詩につきましては、皆様よく御承知のことと思います。

日本においても、イギリスのシェークスピアをはじめ、バイロンやローズワース、アメリカのエマソン、ホイットマン、デイキンソン等の詩人の名が、よく知られています。

そこで、中国の例をとりますと、実に紀元前十一世紀から、紀元前六世紀におよぶ多くの詩から、三百首を選定したものが『詩経』として成立しております。編集されたのは、紀元前四七五年とのことです。

伝える所によりますと、古代中国では「採詩の官」という役職がおかれました。

王様から命令をうけた役人が、各地方に派遣され、その土地で歌われている民衆の詩を採録することにより、政治状況の適不適や、庶民の生活の幸不幸を判断するための、参考資料になりました。

それほど為政者にとつても、民衆における詩と生活とは、表裏一体となっております。

こうして、いかなる民族でも、詩の歴史は伝承され、現代に到達したといえましょう。

そこで本日は、私の感じた「詩と禪」について述べてみたいと思います。

まず、「禪と中国の詩」についての関係であります。

中国では、西紀六一八年に唐の王朝が成立しました。

その治世三百年間において、中国の詩は、内容、形態ともに完成されました。

李白、杜甫をはじめ、有名な詩人が、満天の星のように輝き、多くの秀れた作品を残しております。

実践の面からも、この中国の詩の完成と、禪が思想の面からも、飛躍的に発展した時期とが、一つの時代に遭遇したことは、お互いに幸



せであつたと言えましよう。

従来、中国の文学を専攻する人達は、文字通り、その文学的方面のみを強調し、禪文学と呼ばれる、禪門関係の詩文には、きわめて冷淡でありました。

一方、禪門の歴史や思想を研究するグループは、もっぱら超世間的な奥義を究めんとして、中国の詩文、または一般社会の文学は、とかく無視をしてきました。

この事情は、当然と言えば当然であります。しかし、将来は、この両者を関連させることにより、文学的視野も開け、より深い禪の精神も、研究することが可能であると思われまます。

これは、二十一世紀に向かつての、大きな課題であります。

例えば玄奘三蔵は、唐朝二代皇帝の六二九年インドに渡り、多くの經典を将来して長安に帰国しました。

そして、皇帝の絶大なる庇護のもと、般若經をはじめとする、多くの經典を翻訳いたしました。

唐王朝の建国当初におけるこの事實は、その後の禪門にも、大きな影響を与えております。

中国における禪は、不立文字を標榜しながらも、達磨大師より三祖僧璨に至るまでは、楞伽經を所依の經典としました。

四祖道信に至って、般若經を所依の經典としましたが、これは禪の思想界における一大転換であります。

よく知られているように、五祖弘忍は、七百人の門弟の中より、達磨正伝の佛法を伝授するにあたり、弟子達に各自の所得した禪にたいする感想を、「詩」に托して呈出させました。

この際、「文章」ではなく、短かい「詩」によって表現させたことに、大きな意義があると思えます。

時に弘忍門下で、嗣法の弟子であると、もつとも囑望されていた神秀上座は、自分の悟りの気持ちをおのづかに表現しました。

身是菩提樹 身は是れ菩提樹

心如明鏡台 心は明鏡台の如し

時時勤拂拭 時時に勤めて拂拭せよ

莫使有塵埃 塵埃を有らしむること莫かれ

結論的に言えば、後述する六祖慧能の詩が、

五祖弘忍によって印可されたため、神秀上座の詩は、第二義的になるものとして、とかく軽視されております。

しかし、私は、悟りに到達するための一つの方便説として、立派な詩であると思います。すなわち、私達の体は、本来、悟りを開いている菩提樹であり、心は天地のあらゆるものを写し出す、素晴らしい鏡である。

ただ、時として人は、さまざまな煩惱により、美しい心の鏡も曇ってしまうことがある。

そのような時には、鏡を磨くのと同様に、自分自身の心を磨けとの指摘であります。

この禪思想は、漸悟と呼ばれ、五祖弘忍の住した黄梅山よりも北方、洛陽を中心に宣布されたので、北宗禪と称されています。

それに対して、慧能の詩は次のようになっております。

菩提本無樹 菩提もと樹なし

明鏡亦非台 明鏡も亦台に非ず

本来無一物 本来無一物

何処有塵埃 何れの処にか塵埃有らん

慧能の詩によれば、私達は本来が悟りの姿、悟りの心情そのものである。

したがって、塵埃を留めようにも、留めるべき何物も存在しない。との立場であります。

これは確かに、私達の心の眞実を表現したものと云えましょう。

この思想が、やがて禪の根幹をなすのですが、

黄梅山より南の方に発展したので「南宗禪」と呼ばれました。

また、神秀上座の「漸悟」にたいし、「頓悟」と呼ばれる所以です。

この六祖慧能による「頓悟」、すなわち、事物を直観的に把握する坐禪觀が、現今のアメリカ、ヨーロッパの参禪者達に受容されているものと思われます。

私は一九九七年十月、五祖弘忍の住した黄梅山を訪れました。

天候にも恵まれ、白い岩石と紅葉の山肌は、いかにも聖なる山と言うイメージでした。

まず、五祖弘忍の真身像に読経礼拝をしました。

その後、五祖が親しく説法をした講経台にて、往時を想像致しました。

また、何より私に強い印象を与えたのは、確房跡、すなわち米つき部屋でした。

伝える所によれば、五祖は慧能をはじめて相見した時、この人物の非凡なることを直観的に認め、意識的に米つき部屋にて、作務のみをさせました。

慧能は小男だったので、腰に重い石をつけて、お米をついたと言われています。

私は、この米つき小屋に入り、慧能が腰に下げていた石に触った時の感激は、終生、忘れることができません。

この部屋で、ある夜半に五祖は慧能にたいし、禪宗六祖としての印可証明を与えました。

他の多くの弟子たちの、羨望と嫉視を避けるため、五祖と慧能とは、密かに山を降りました。

やがて、長江の船着場に到着すると、今は六祖となった弟子の慧能を舟の中に坐らせ、五祖自らが竿をとって、対岸に渡したと伝えられています。

こうした禪門の師資相承の様子は、黄梅山を

参拝した私には、非常に印象にのこり、自然に次の詩が完成されました。

訪黄梅山 黄梅山を訪う

半夜法身ぎよ篤小船 半夜法身小船に篤さかさし

曹溪命脈密流伝 曹溪の命脈密みつに流伝す

講經台上望南北 講經台上南北を望む

妙偈方親心豁然 妙偈方に親しく心豁然たり

私は、五祖弘忍が説法をした講經台から、更に上の山に登りました。

やがて頂上近くになると、北方の山岳も、南方の平野も見渡すことができました。

風景の南北と共に、はからずも神秀上座と六祖慧能との南北両禪を感じた次第です。

今こそ、神秀上座の詩と六祖慧能の詩とは、

私にとつては一体となり、本当に言語以前の親しさを体験致しました。

このようにして、歴代の祖師達は、各自の到達せる悟りの心情を、文章で表現すると同時に、

文章にては表現不可能な究極の見地は、詩によつて表現しております。

道元禪師も瑩山禪師も、この点は全く同じであります。

したがつて、私達は従来、中国の詩、特に禪詩と呼ばれるものを中心にして、歴代祖師の思想を研究してきました。

以上は、中国の詩を中心にして考察してきた一例ですが、日本古来のものとしては、和歌があり俳句があります。

日本の僧侶は、中国の詩と共に、和歌により仏教思想を表現しました。

歌僧として有名な西行法師は、次のように歌っております。

ねがわくは 花の下にて 春死なん

そのきさらぎの 望月のころ

人生の無情を感じ、諸国を旅して到り得た心は、ついに釈尊の涅槃の日を、自己の臨終の日

として、願望するようになりました。

生も死も、全く仏の心に到達したと言えるでしょう。

良寛さんは、禪詩も沢山残していますが、次の和歌は殊に味わい深いと思います。

良寛に 辞世あるかと 人間はば

南無阿弥陀仏と いふて答へよ

良寛さんの、到り得た心情とすれば、南北の両禪どころか、禪も念仏も一つになっているとの、尊い悟りの境涯であると思います。

この良寛さんの時代になりますと、禪に参じた女性達が、和歌と同時に俳句により、悟りの道を表現した作品がみられます。

これは、日本の禪における大きな特徴と言えるでしょう。

最近、アメリカの一部の人達に、俳句が流行していることを聞きました。

先月のこと、私は偶然にも古本屋にて次の本

を見つけました。

それは W・C フラナガン 氏 (William C. Flanagan. Road to the Deep North) の著、松尾芭蕉、『奥の細道』の翻訳本でした。

私達、日本人にとり、日本の詩歌が、外国語に翻訳されることは、本当に嬉しいことです。

六祖慧能の詩で説明したように、直観を重んじる禪の境涯を、五・七・五の短かい定型詩によって表現することは、素晴らしいことだと思います。

皆様はどのように感じられるでしょうか。

かつて私が学生時代、鈴木大拙先生の講演を聞きました。その中で、非常に印象に残っている言葉があります。それは、「現代の若者には詩がない」と言うお話しの一説でした。他に、どのような内容の講演であったのか、今はすっかり忘れてしまいました。

しかし、『ボエム』がないとの言葉は、今でも

はっきり覚えています。

人間が人間として、よりよく生存していくためには、「詩とロマンの心」とは不可欠のように思われます。

洋の東西を問わず、新年を迎えますと、人々は新しい志を、いろいろな形で表現致します。

私は中国の詩の形により、一九九八年の元旦に次のように表現しました。

今朝観妙接新年 今朝妙をみょう観じて新年に接す

一錫遊空慕昔賢 一錫空に遊くうんで昔賢を慕う

南北東西三隻襪 南北東西三隻の襪べつ

修来證去放浪禪 修し来り證し去る放浪禪

右の詩の大意は、私は新年を迎えるにあたり、これまで以上に歴代のお祖師様方の行迹を学びたいと思います。

そのために私は、東西南北、何れの所にも、縁にしたがって出かけることでしよう。

一言でもって、私の禪の家風を表現するとす

れば、「放浪禪」と定義することができます。

どうか、禪センターの皆様も、尊い自己の参禪を通して、その心情を、それぞれの詩によって表現されますよう、心より念願する次第です。

終わりにあたり、皆様とお目にかかる、この尊いご縁を与えて頂いた、善光寺黒田先生に深く感謝申し上げます。

○

今回、アメリカの禪センターを訪問しての感激を、私は帰途、太平洋上の機内にて、次のような一詩にまとめました。

訪亜米利加禪堂 アメリカの禪堂を訪う

拈来公案共論禪 公案を拈じ来って共に禪を

論じ

碧眼僧徒衣鉢伝 碧眼の僧徒衣鉢を伝う

誰識往時開教志 誰か識る往時開教の志

坐堂窓外聴清泉 坐堂窓外清泉を聴く